アシステック通信

ASSISTECH

2019
78号

ひょうごKOBE
福祉用具・介護ロボットフェスティバル2019 開催
《関連記事12ページ》

次世代型住モデル空間
実証評価スタート
《関連ページ2ページ》

目　次

P.1　ご挨拶
P.3　組織紹介
P.5　平成30年度研究の取り組みから
P.8　研修のご案内
P.12　介護ロボット普及推進事業より
P.13　ISPO2019 のお知らせ
P.15　アシステック掲示板 ― 兵庫ランニングアカデミー 2019
― 小児筋電義手バンク

THE HYOGO INSTITUTE OF ASSISTIVE TECHNOLOGY
兵庫県立福祉のまちづくり研究所

ご　挨　拶

ユーザーが使いやすい機器の開発支援と普及を目指して

介護ロボット開発支援・普及推進センターとして新たな一歩

次　長
（介護ロボット開発支援･普及推進センター担当）
水口　信宏（社会福祉士）

この度の福祉のまちづくり研究所の組織再編により、介護ロボット開発支援・普及推進センター担当となりました。昨年度、企業の開発されている介護ロボット等の実証評価を目的に整備した「次世代型住モデル空間」と、平成8年以降、福祉用具の相談支援・情報提供・用具を活用した介護技術の普及啓発を目的として役割を担っている「福祉用具展示ホール」を統括し､新たな一歩を踏み出すこととなりました。

一人ひとりのスタッフが担っている業務もこれまで以上に広がり、責務も大きいところですが、一体的運営を図ることで、セラピスト、社会福祉士等の対人援助職、また各専門分野を有する研究員との連携強化により、現場ニーズをより共有することで、皆様に有益なサービスとして還元できるよう取り組んでまいります。

従来の対人援助の専門職が、開発のプロセスに関わる上では、開発者との契約事務や知的財産権など、それまで経験のない業務や法律と向き合わなければならないことが多くあります。医療福祉職にとっても新たな領域の支援ですが、これからの福祉・介護現場を担う方々や、福祉サービスを受ける方々が、「今の時代、こんな機器があってよかった」と思っていただける状況を夢見て、更なる努力を重ねてまいりたいと思います。

介護ロボットの施策や開発の動きが本格化している中にありながらも未だに、「介護ロボットは人に代わって介護をしてくれるロボット」というイメージをもつ介護職員の方も少なくありません。生活や介護する主体はあくまで人であり、機器はその人をサポートするツールにすぎないことを理解しておく必要があります。たとえ将来に向けて技術が発達し、人に代わって介護するロボットが登場してきたとしても、それを何のために導入し、どう活用するかは、人の倫理や判断に委ねられることになります。人が担うべき役割と、機器に委ねることができる役割は、技術の進歩によって変化していくものかもしれませんが、対人援助を実践する上での人の価値は変わらないものと思います。

今、一つひとつのケア業務の負担軽減を図るロボットも脚光をあびています。介護現場は、人手不足の問題が深刻化する中で、サービスを利用する人、また支える人を守り、その人の生活・職場環境や将来の安全・安心なサービスを創造していかなければなりません。介護ロボットの現状や動向を理解し、一方ではそれぞれの現場の業務分析と整理により、新しい技術に求める業務の領域を常に模索し、これからの時代を見据えた有効な手段を客観的な視点で提案していくことが求められているように思っています。皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

最後に､今年10月には「ISPO2019（第17回 国際義肢装具協会世界大会）」が30年ぶりに神戸で開催されます。当研究所も兵庫県･神戸市とともに盛会な大会となるよう支援しています。介護･医療ロボットの展示会やパラスポーツフェスティバルも開催されますので､関係者の皆様のご来場を心からお待ちしております。

介護ロボット開発支援・普及推進センター

開発支援

開発メーカーへの医療福祉職等による アドバイス

開発支援窓口

開発コンセプト段階から試作機の改良など、企業の機器開発に関わる相談を担います。介護・医療現場の専門家や工学等の専門家のご紹介、開発に関わる様々な情報提供など、現場のニーズに沿った機器開発ができるようサポートします。

開発段階や製品化されている機器の ユーザーにとっての使いやすさの評価

次世代型住モデル空間

作業療法士、理学療法士、研究員等が各種の計測機器を用い、企業の希望の評価内容を確認の上、可動壁により想定される住環境を再現しながら「ユーザーにとっての機器の使いやすさ」の評価をいたします。また、介護ロボットの導入を検討されている施設等に対して、空間を活用しながらアドバイスを行います。

お問合せ
TEL：078-927-2755　FAX：078-920-9807
E-mail：info@kobe-reha-robo.jp

普及推進

見て・触れて・試して・学ぶ

福祉用具展示ホール

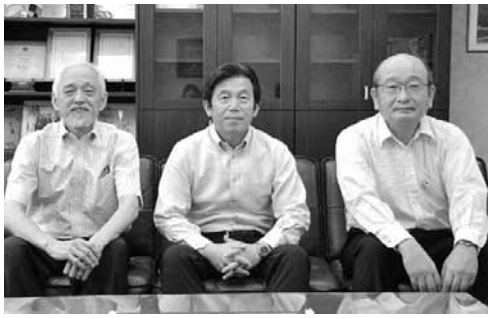
福祉用具展示ホールでは、地域に向けて、企業の協力による約750点の「常設展示」のほか、特定テーマを取り上げた期間限定展示「企画展示」、また「特別展示会」等を実施し、広く関係者の方々への情報提供や用具の選び方使い方等の相談支援を行っています。また国の介護ロボットの施策の動向を踏まえ、フォーラムやワークショップ、研修会を開催し、普及啓発を推進しています。

お問合せ
TEL：078-927-2727（代表）　FAX：078-927-2752
E-mail：tenji@hwc.or.jp

福祉のまちづくり研究所　体制と役割

福祉のまちづくり研究所では、ユニバーサル社会の実現のために、研究開発をはじめ、各種事業に取り組んでいます。

ここでは、研究所の組織体制と役割について部門ごとにご紹介いたします。



参与 相良、 所長 陳、 次長 川中

ロボットリハビリテーションセンター課（庶務・研究）

研究部門では、ロボットテクノロジーミッションとして多職種連携により現場ニーズを掘り起こし、技術面から現場の課題解決を支援する研究開発を進めています。

その結果、筋電義手や術前練習ができる実物大の骨盤モデルなどに関する４件の特許取得に至りました。

庶務部門では、研究所の取り組みや成果を情報発信するため、機関誌の発行やＨＰの管理、取材の調整、展示会への出展手続きなどを行っています。

また、研究開発等が円滑に推進されるよう、研究費等の執行管理、関係機関等との連絡調整や契約に関する手続き、関係事業に係る各種委員会の開催など、研究所の事業に関する各種事務手続きなどを主に担っています。

中村(豪)、 高見、 石井、 中村(秀)
矢野、 坂井、 田中(亜)、 本田

介護ロボット開発支援・普及推進センター

今年度から組織改編により、「介護ロボット開発支援・普及推進センター」として介護ロボットの開発支援から普及推進までの一体化した取り組みを展開することになりました。

皆様のご意見を伺いながら、福祉用具・介護ロボットの情報蓄積拠点としての役割が担えるようセンター一丸となって取り組んでまいります。センターは、皆様にご利用いただいている福祉用具展示ホールも含まれており、県内の方をはじめ、他府県も含めた多くの医療福祉分野の関係者の方々や将来を担う医療介護専攻課程の学生様など、年間約14,000人の皆様にご来場いただいています。最近では我が国のロボット技術への関心も高まる中、海外からの来訪者も増えてきています。

皆様のご来場をお待ちしております。

水口、 中川、 宇都宮、 北川、 福元、 西岡
伊藤(有)、 美馬、 伊藤(美)、 谷口

研究課

今年度も居住支援と移動支援の両研究ミッションを中心に研究開発に取り組んでいます。

居住支援ミッションでは、比較的軽度の認知症高齢者がより長く自立生活を継続できるよう、工学的な観点から支援することを目指して、介護ロボットなどを使う際の空間的配慮といった住環境の改善に関する研究や、IoTを活用して認知症の本人の日常生活をアシストするシステムの開発を進めています。

移動支援ミッションでは、車椅子を漕ぐ力やブレーキ力を計ることのできる計測用車椅子を用いて、下り坂でも安心して介助できる車椅子の研究開発を進めています。近い将来、製品が皆さまの手元に届くように精力的に取り組んでまいります。

大森、 福井、 北川、 赤澤
濱本、 中村(俊)、 奥田

研修課

研修課では、主に介護・福祉現場で働かれている方々を対象とした様々な研修を行っています。

兵庫県から委託を受けている法定研修や自主研修を通じ、認知症介護、障害福祉、介護予防に関する研修を実施し、高齢者や認知症の方、障害のある方々が地域で生活できるように支援できる人材育成を目的としています。

いずれの研修も国の施策を反映し、新しい情報・技術を盛り込んだ研修内容です。支援者の知識と技術、事業所の質の向上のため、ぜひ研修にお申込み下さい。お待ちしております！

（令和元年度の研修一覧は10・11ページに記載しています）

安岡、 田中(千)、 代田、 谷垣
上野、 石谷、 竹田

新・研修課長 あいさつ

次長兼研修課長　**石谷　典子**

平素より、研修課の事業活動にご支援ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度、19年ぶりに戻ってまいりました。何もかもが様変わりしていて、毎日が戸惑いの連続ですが、医療の現場で培ってきた経験を今後の活動に活かしていければと思っております。専門的知識や技術、実践的指導力の向上に寄与できるよう、講座内容の更なる充実に努めたいと思いますので、どんな小さなことでも構いません、気軽に声をかけていただき、ご意見やお知恵を拝借させてください。多くの皆さまに受講していただけるよう職員一丸となって運営してまいります。よろしくお願いいたします！

障害から高齢に対する課題解決型の研究開発
～ロボットテクノロジーミッションの紹介～

ロボットテクノロジーミッション
主査（研究員） 本田　雄一郎

ロボットテクノロジーミッションでは、現場ニーズに基づいた技術･機器開発に力を注いでいます。これまでに実施してきたプロジェクトの成果を積み上げ、開発手法からロボット技術の応用や研究成果の再活用ができるようになりました。そこからの成果が商品化やサービス化に結びついています。

排泄支援装置　（図１）	カテーテルを尿道に入れて排尿する訓練等に用いられます。	商品化済
量産型筋電義手　（図２）	手を欠損した方が両手を使うような日常の動作を補助します。	最終テスト中
術前シミュレーション用骨盤モデル　（図３）	股関節にインプラントを固定する手術前に実物大のモデルで身体を使った確認ができます。	製作 サービス化済
身体動作評価装置 Body-KIN®　（図４）	簡単な日常動作から身体の使い方を評価し、動きの元気さを測ります。	サービス 開始目前

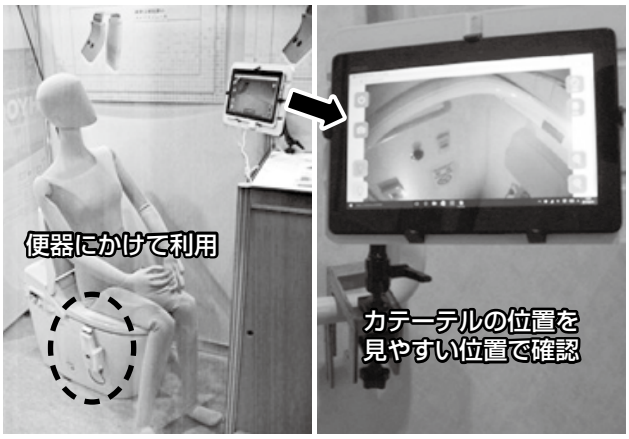


図1　排泄支援装置

図2　量産型筋電義手

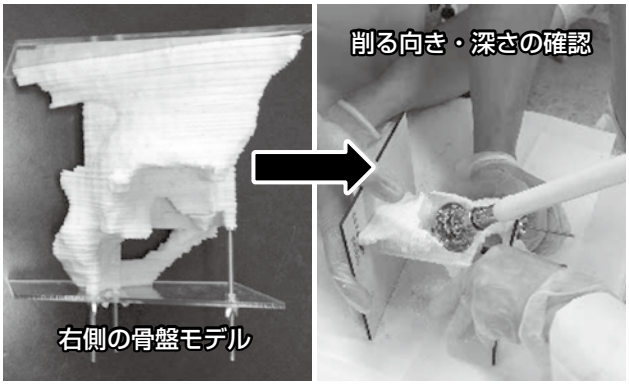


図3　術前シミュレーション用骨盤モデル

図4　身体動作評価装置 Body-KIN®

IoTを活用した促しシステムの開発
～認知症高齢者の在宅での生活支援～

居住支援ミッション
主任（研究員） 大森　清博

居住支援ミッションでは「認知症の人のご自宅での暮らしの継続を支援する」ことを目的として、環境整備の手法や支援機器の研究開発を進めています。

促しシステム

認知症の前段階や初期段階ではしばしば「もの忘れ」が見られます。促しシステムは、もの忘れから生じる生活上の不自由さに対して、屋内にいくつかのセンサを設置して、何をしようとしているのかを検知して、適切な案内で支援を行うものです（図1）。例えば、玄関扉に開閉検知センサ、玄関ホールに人感センサを設置し、出入りの方向を確認した上で「いってらっしゃい、戸締まり忘れないでね」といった声かけを行います。また、全てを自動化するのはなく、自分でできることをできるだけ長く続けてもらうことを目指しています。

在宅での評価試験

もの忘れのために日常生活で不自由さを感じている高齢者3名に協力いただき、それぞれのお宅に促しシステムを設置して3ヶ月間の評価試験を行いました。試験終了後のヒアリングでは、9場面中、役に立ったと回答したのが2場面、やや役に立ったのが1場面でした。また、直接的な効果だけでなく、促しの声（子や孫の録音した声）を聞けるのがうれしい、同居者にとって安心感がある、といった意見も得られました。

一方、促しシステムの設置については、お宅の間取りだけでなく生活スタイルに合わせて調整が必要となり、実際に使用を始めることで新しい要望が生まれ、さらに調整が必要となることもありました。今後はセンサの組み合わせなどを自動的に調整する方式の検討や、介護者が簡単に調整可能な仕組みの開発が望まれることを確認しました。なお、本研究はJSPS科研費16H04024の助成を受けて実施しました。

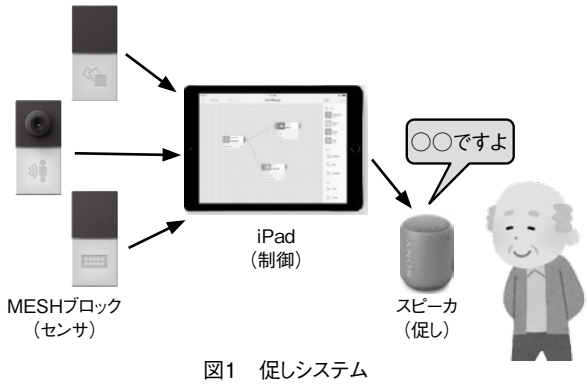


図1　促しシステム

図2　評価者宅での設置例

漕ぐ力がわかる車椅子ホイールの開発と環境の評価
～移動支援ミッションの紹介～

移動支援ミッション
主査（技師） 中村　俊哉

移動支援ミッションでは、障害を持つ方々の移動を支援するための、「人」「（福祉用具などの）道具」「（移動を行う）環境」「（移動に必要な）情報」に対し多面的なアプローチにより、主に工学的な見地から研究に取り組んでいます。

今回は、昨年度実施した研究の中から「漕ぐ力がわかる車椅子ホイールの開発と環境の評価 」について報告します。

アシステック通信75号では、「車椅子を漕ぐ力を計れるホイールの開発」と題して、マラソン用の車椅子を用いてその車椅子を漕ぐときのトルク（以下、力）が計れるホイールの開発の話をしました。このホイールの利点は、従来の測定装置に比べて軽量であることから、計測装置の重さの影響が比較的に少なく、実際に走っている時の漕ぐ力を計測できることです。この技術を用いて、日常生活用の車椅子で、車椅子を漕ぐ力が計測できる計測用のホイールを開発しました。そしてこの計測用のホイールを搭載した車椅子を使い、坂道を下る際のブレーキをかける力を計測しました。今回計測したデータを、新しい車椅子のブレーキシステムを開発するための基礎データとしたり、坂道の勾配と車椅子に乗っている人が発揮するブレーキ力との関係から、坂道環境の評価のために用いることを予定しています。

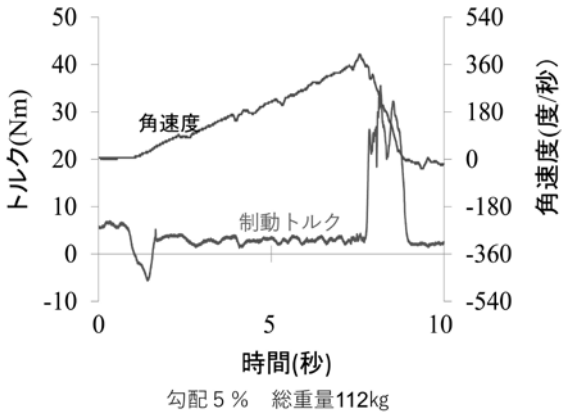


図1　計測結果の例

図2　計測用ホイール
（車椅子に取り付けたところ）

持ち上げない介護推進プロジェクトについて

我が国の総人口は1億2,671万人で、65歳以上人口は3,515万人となり高齢化率（総人口に占める割合）は27.7%と報告されています（平成29年10月1日時点）。65歳以上の者が増加することにより高齢化率は上昇し続け、2065年には国民2.6人に1人が65歳以上の者となる社会が到来すると推計されています。高齢者人口の増加は、要介護者の増加、老老介護の増加をもたらし、介護者の身体的負担の増加も引き起こします。介護職の腰痛問題は深刻であり、厚生労働省の労働災害統計によると、業務上の腰痛による休業4日以上の労災申請数は、保健衛生業（看護師と介護士）が製造業を抑えて全産業の1位となっています。厚生労働省は、1994年に「職場における腰痛予防対策指針」を公布し2013年に『福祉・医療分野における介護・看護作業』という適応を拡大した指針を明示しました。しかし、伝統的な介護方法からの脱却や施設の整備などの課題があり腰痛予防対策は進んでいないのが現状です。

当研究所では、2018年度から『持ち上げない介護推進プロジェクト』を立ち上げ、ノーリフティングケア（ノーリフティングケアとは要介護者の体を人力で持ち上げたり、抱え上げたり、ベッド上を引きずって移動しない介護のことです。）の普及に向けて研修を体系化し、腰痛予防対策を取り入れた介護技術等を学び積極的にノーリフティングケアに取り組む施設をモデル施設として認定し、兵庫県内の普及拠点として支援する取り組みを行っています。

『持ち上げない介護推進プロジェクト』の一つであるノーリフティングケア研修では、『移乗介助用具体験講座』、『利用者と介護者の体を守る介護技術研修』、『腰痛予防推進研修』、『ノーリフティングマネジメント研修』の大きく4つの研修に分かれます。さらに、テクノエイド協会と共催し、介護リフトの操作技能を高め、介護・医療現場のリーダーとして安全に活用でき指導的立場を担う人材育成を行う『リフトリーダー養成研修』にも取り組んでいます。

移乗介助用具体験講座

利用者と介護者の体を守る介護技術研修

ノーリフティングケア研修の研修体系では、それぞれの研修に繋がりを持たせ、ノーリフティングケアはただ単にリフトを使うケアの方法ではなく、利用者の状態によって様々なケアの方法を提供できる看護・介護職員の人材育成を行っています。『移乗介助用具体験講座』では、移乗関連機器を主とした福祉用具を使用し、操作に慣れることで施設の導入普及につなげるために90分で福祉用具の体験を行います。『利用者と介護者の体を守る介護技術研修』では、基本動作介助・姿勢管理編として高齢者や利用者の臥位や座位の姿勢が生活に影響を及ぼすことを学び、不良姿勢の修正方法などを実技で学びます。移乗介助編では、ベッドから車いす等への移乗を力任せに持ち上げ介助を行うのではなく、高齢者や利用者の方の状態に合わせた移乗方法、また福祉用具・機器を使用した移乗方法を学びます。『腰痛予防推進研修』では、看護・介護の現場で働く現場職員や施設の管理職を対象として、腰痛発生の機序や腰痛予防に関する法令を理解し、腰痛予防対策の推進の

ために必要なリスクマネジメントの考え方と腰痛予防に基づいた介護姿勢を学びます。『ノーリフティングケアマネジメント研修』は、『利用者と介護者の体を守る介護技術研修』と『腰痛予防推進研修』を受講した施設が半年間におよび施設管理者を含めた数名で受講し、事前課題や研修中に課題を持ち帰り施設全体で取り組む研修です。そして、この研修を受講し、介護者の腰痛予防や介護負担軽減、利用者の安全・安心につながる持ち上げない介護を普及推進する施設に対して「ひょうごノーリフティングケアモデル施設」としてモデル施設認定を行います。2018年度はKOBE須磨きらくえん、万寿の家、くにうみの里の3施設がモデル施設として認定されました。今後は持ち上げない介護に取り組んでいこうという施設からの視察の受け入れや施設で取り組んだ実践報告を通じて普及啓発の役割を担っていただきます。

ノーリフティングケアマネジメント研修の風景

いよいよ、6月から2019年度のノーリフティングケア研修が始まりました。第1回目は『利用者と介護者の体を守る介護技術研修～基本動作介助・姿勢管理編～』で、講師はナチュラルハートフルケアネットワークの正木健一先生でした。持ち上げ介助・引きずり介助・不良姿勢は介助者の体への負担はもちろんのこと、介護される高齢者や障害者の重度化を引き起こす原因となります。このような介護を見直し、高齢者や障害者の方の豊かな生活を保障できるケアを目指し、高齢者や障害者の方のあるべき姿や姿勢を整える事、利用者と介護者の体を守る動作介助の考え方と方法を学びました。なぜ利用者の姿勢を整える必要があるのか、不良姿勢が高齢者や障害者の方にどういった影響を及ぼすのかなど、グループワークを通じて意見交換したり、ペアを組んで動作介助方法の技術練習をしたりしました。受講者の中には、休憩時間にペアを組んで熱心に技術練習の復習を行う方もいらっしゃいました。

今後はノーリフティングケアとは何かを視覚的に捉えやすく、分かりやすい広報紙面を作成したり、看護・介護職員だけでなく広く一般県民、高齢者や障害者の相談支援を行っている専門職等を対象とした講演会や体験会を通じて『持ち上げない介護』の普及をすすめて参りたいと思います。

令和元年度　研修予定

予定は変更になる場合があります。詳しくは、福祉のまちづくり研究所ホームページをご覧ください。

ノーリフティングケア研修

研　修　名	内　容	日　時	定　員
移乗用具介助体験講座 ①基本動作介助/移動介助 編 ②移乗介助 編	福祉用具に慣れる。また使用体験を行う事で施設への導入や普及を考えられるようになる。	2019年6月～2020年2月 (いずれも各月１回開催)	各回 ６名 (先着)
利用者と介護者の体を守る介護技術研修 ①基本動作介助/移動介助 編 ②移乗介助 編	日常的な人の動きを知り、基本的動作介助や姿勢保持、移乗介助ができる。また、福祉用具や機器を使用して「持ち上げない介護」が出来るようになる。	2019年6月･8月･10月･12月･2020年2月 (いずれも各月1回開催)	各回 24名 (先着)
腰痛予防研修 -介護職に向けたノーリフティングケア-	腰痛発生原因を理解し、リスク管理が行える視点、福祉用具や機器を活用した腰痛予防対策を学ぶ。	2019年7月5日（金） 7月6日（土）	30名
安全なケアの業務改善研修 ―管理職編―	腰痛予防に関する法令を理解し必要なリスクマネジメントができるようになる。腰痛予防対策と施設経営の関係性を学ぶ。	2019年7月5日（金）	30名
ノーリフティングケアマネジメント研修	ノーリフティングケアの概念を理解し実践するためのマネジメントが出来るようになる。	2019年9月～２月 (5日間研修)	５施設
リフトリーダー養成研修	テクノエイド協会の定める「リフトリーダー養成カリキュラム」に沿った研修で、希望者はJASPA介護リフト普及協会認定試験の受験が可能。	2019年9月13日（金） 9月14日（土）	30名

介護職員向け研修ほか

研　修　名	内　容	日　時	定　員
介護職員実践基礎研修	調整中 昨年度は、『働きやすさ』『メンタルヘルス』『コミュニケーション』『記録の書き方』『認知症の人との関わり方』『防災対策』『ターミナルケア』の7回を実施。受講者からは、「現場で実践できる内容で参考になった」「リラックスした雰囲気で初対面の方とのグループワークでも楽しく取り組めた」などの感想をいただいた。	2019年10月～３月 月1回程度	30名
動きを引き出す ポジショニング	姿勢管理を見直し、安定した姿勢と活動を支援する環境を作るスキルを身につける。	2019年10月2日（水） 10月3日（木）	24名
福祉用具のポイント研修	適切な用具の選定方法、状態像に応じた用具の効果的活用方法について学ぶ。	調整中	30名
自立を支援する住まいの工夫と福祉用具	使用する福祉用具が身体機能や生活方法、住環境と適合すれば、自立度の高い生活やQOL向上の支援に繋がることを学ぶ。	調整中	30名
高次脳機能障害研修 ―専門職向け―	「認知と運動」 高次脳機能障害者の運動とスポーツについて学ぶ。	調整中	未確定
高次脳機能障害研修 ― 一般向け ―	「認知と運動」 高次脳機能障害者の家庭でできる運動を知ってもらう。	調整中	未確定

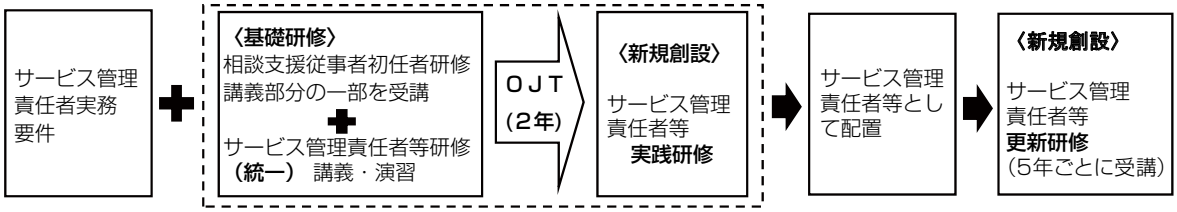
法定研修ほか

法厚生労働省が定める法定研修

研　　修　　名	研修日数	開催回数
認知症介護研修		
法認知症介護実践研修（実践者研修）※自施設実習あり	6	年４回
法認知症介護実践研修（実践リーダー研修）※自施設実習あり	10	年２回
法認知症対応型サービス事業開設者研修　※職場体験実習１日間	2	年１回
法認知症対応型サービス事業管理者研修	3	年４回
法小規模多機能型サービス等計画作成担当者研修	2	年１回
認知症介護実践研修(実践者研修／実践リーダー研修)修了者のフォローアップ研修	3	年１回
相談支援従事者・サービス管理責任者等研修		
法相談支援従事者初任者研修	5	年１回
法相談支援従事者現任研修	3	年１回
法サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者基礎研修 ※配置には相談支援従事者初任者研修合同講義の受講が必要	3	年１回
法サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者更新研修 ※令和元年度より新規創設。受講には規定の職種による一定の実務経験が必要	1	年１回
強度行動障害支援者養成研修		
法強度行動障害支援者養成研修（基礎研修）	2	年１回
法強度行動障害支援者養成研修（実践研修）	2	年１回
高齢障害者支援の研修		
相談支援をつなぐ研修	1	調整中

サービス管理責任者等研修制度の見直しについて　－見直しのポイント－

○　研修が、基礎研修、実践研修、更新研修に分けられました。



○　研修のカリキュラムを統一し、共通で実施することになりました。
平成30年度以前の受講者は、統一カリキュラムを受講したものとみなされます。
⇒いずれかの分野を受講していれば、他の分野のサビ管等として従事できます。（例：生活介護分野のみの講者が就労系の事業所のサビ管や障害児通所支援事業所の児発管として従事することができます。）

○　サービス管理責任者等更新研修が新規創設されました。
対象者は、現にサービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）、管理者又は相談支援専門員として従事しており、サービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）として従事している又は従事する予定者。
過去５年間に通算２年以上のサービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）、管理者又は相談支援専門員の実務経験があり、サービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）として従事している又は従事する予定者申込は、夏～秋にかけて、研修実施は令和２年１月下旬～３月上旬ごろを予定しています。

ひょうご・KOBE福祉用具・介護ロボットフェスティバル2019開催

去る2月11日（祝）・12日（火）、福祉用具・介護ロボットフェスティバル2019を開催いたしました。

厚生労働省の福祉用具・介護ロボット実用化支援事業「介護ロボットフォーラム」と、長年当研究所が実施してまいりました「福祉用具フェスティバル」を統合。今回初めて研究所と隣接している障害者スポーツ交流館を会場に、企業59社の出展のご協力をいただき特別展示会を実施いたしました。

特別展示会の中央ステージでは、総合リハビリテーションセンター中央病院の理学療法士による「ロボットスーツHAL」「リズム歩行アシスト」のデモンストレーションやナチュラルハートフルネットワーク兵庫支部による「持ち上げない介護」の実演もあり、多くの皆さんが熱心に聞き入っていました。

また兵庫、神戸の福祉用具のメーカー 9社からも出展いただき、地元企業のアピールもしていただきました。

また当研究所を会場に開催した「ひょうごKOBE介護ロボットフォーラム」では、厚生労働省・兵庫県の行政施策の説明をはじめ、厚生労働省の実用化支援事業の成果について開発メーカー、大学、職能団体から報告をいただきました。午後のプログラムでは「移乗介助ロボット」に着目して、全国的にも先行して活用されている2施設から、活用報告をいただき、多くの参加者の関心を寄せていました。

特別展示会

ロボットスーツHALの実演

持ち上げない介護の実演

ひょうごKOBE介護ロボットフォーラム

【行政説明】
厚生労働省老健局　高齢者支援課
立花　敦子　氏

【厚生労働省：福祉用具・介護ロボット実用化支援事業成果報告】
一般社団法人　日本作業療法士協会
小林　毅　氏

【移乗介護ロボットの活用事例から学ぶ】
㊧ リショーネ Plus　活用事例
社会福祉法人 サンライフ / サン・ビジョン
篠田　明　氏
㊨ HAL 腰タイプ介護支援用　活用事例
社会福祉法人 野の花会
楠元　寛之　氏

10月、神戸で開催

第17回国際義肢装具協会世界大会(ISPO2019)

～開催地も関連イベントで支援～

研究課長 兼 ロボットリハビリテーションセンター課 課長(研究担当)
赤澤　康史

国際義肢装具協会ISPOは医師・義肢装具士・エンジニア・理学療法士・作業療法士・介護職など多職種で構成され、義肢装具関連技術の向上と教育の普及･標準化をめざして活動する団体です。前々回はフランスのリヨン、前回は南アフリカ共和国のケープタウンなど、２年ごとに国際学術会議を世界各地で開催しています。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会まであと約１年となり、さらにその翌年にはワールドマスターズゲームズ2021関西が開催されることも決まりました。このような時季である今年の秋にこの世界大会が、30年ぶりに日本、しかも神戸で開かれます。開催地である兵庫県や神戸市、そして私たち兵庫県社会福祉事業団もイベントを企画し、この大会を盛り上げようと支援しています。

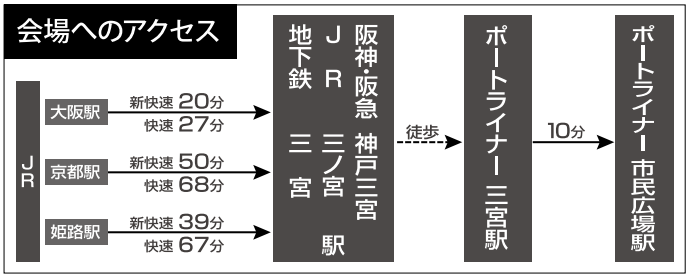
一つは、10月5日（土)･6日（日）にワールド記念ホールで開催されるひょうごパラスポーツフェスティバルです。パラリンピアンによるトークショーや、車いすテニス・アンプティサッカー・卓球バレー等のパラスポーツ体験、スポーツ用義足などの展示も行われる、楽しい無料イベントです。詳細はウェブサイトをご覧ください。（情報は随時更新されます。）

https://web.pref.hyogo.lg.jp/kf10/para-sports.html

もう一つは世界大会の企業展示会場内（神戸国際展示場、10月5日～ 10月8日）になりますが、神戸市が主体となって企業に呼びかけ実現することとなった介護・医療ロボット見本市です。世界から100社以上が出展する中、日本の優れたロボット技術を応用した品々によって、ひときわ存在感を発揮するゾーンになると確信しています。有料(一日券 6,500円)ではありますが、滅多にない機会です。特に若い方には良い機会になるでしょう。

なお、当研究所と世界保健機関WHOが共同で企画したシンポジウム「アシスティブテクノロジーで高齢化に立ち向かう」が世界大会の学術プログラムの中で10月6日午後に実施されることを申し添えます。

ISPO2019世界大会とその付随イベントについて概略を紹介しました。皆様お誘い合わせてのご参加をお待ちしております。



会期:2019年10月5日(土)~8日(火) 会場:神戸国際展示場

ISPO 2019展示会

神戸市
介護・医療
ロボット見本市

世界の義肢装具・介護ロボット・福祉用具等の企業150社以上が集結します。

展示会場全体を見て回れる一日券は　(学術会議有料参加者は自由に観覧可)

一般・学生6,500円 ※学校単位事前登録の割引があります。

- 当日参加可。
  (クレジットカード払い ※VISA、MasterCardに限る)
- 事前参加登録および支払可能。
  (公式ウェブサイト(英語)参照、日本語登録代行有料サービスあり)

問合せ先

第17回国際義肢装具協会世界大会(ISPO2019) 事前参加登録係
日本コンベンションサービス株式会社
E-mail:reg-ispo2019@convention.co.jp
TEL:078-303-1101(平日:9:30-17:30)

会期:2019年10月5日(土)~6日(日) 会場:ワールド記念ホール

兵庫県

パラスポーツの「いま」がわかる!体感できる!

参加費無料
(一部、予約優先)

ひょうごパラスポーツフェスティバル

東京2020パラリンピック競技大会とワールドマスターズゲームズ2021関西に向けて気運を高めるため、ワールド記念ホールで、パラスポーツのイベントを開催します。

- パラリンピアンによるトークショー
- パフォーマンスショー
- 車いすバスケットボールやボッチャ等のパラスポーツ体験 など

※イベントの詳細は、公式ウェブページの更新により随時お知らせします。
「ひょうごパラスポーツフェスティバル」で検索、もしくは右のQRコードをご利用ください。
※一部、予約優先です。予約申込の受付は8月下旬に開始予定です。

公式HP QRコード

問合せ先 兵庫県健康福祉部障害福祉局ユニバーサル推進課 電話:078-362-9418 FAX:078-362-9040

アシステック掲示板

兵庫ランニングアカデミー2019
～ISPO2019アフターイベント～を開催します!!

今年の10月に開催されるＩＳＰＯ（国際義肢装具協会）世界大会のアフターイベントとして、パラリンピック金メダリスト ハインリッヒ・ポポフ氏と銀メダリスト山本篤氏を招いて、スポーツ用義足を所有している下肢切断の方を対象とした、ランニング講習会を開催します。

また、講習会前日は、ポポフ氏による公開セミナーを開催します。選手時代から現在までの豊富な経験を話していただく予定です。

ランニング講習会及び公開セミナーの参加申込や詳細等については研究所のウェブサイトでご覧いただき、ぜひご参加ください。

と　き
公開セミナー　10月18日(金) 17：15～18：45
ランニング講習会　10月19日(土) 10：00～17：00
10月20日(日) 10：00～15：00

ところ　神戸学院大学ポートアイランドキャンパス（神戸市中央区港島1-1-3）

参加費　無料（ただし、ランニング講習会参加者については、昼食費を別途徴収いたします。）

小児筋電義手バンク

福祉のまちづくり研究所では、上肢を欠損した子どもの発育に有用な筋電義手の普及を図るために小児筋電義手バンクを開設しております。

皆さまからいただいた寄附金や、筋電義手を活用し、訓練に必要な筋電義手を無償で貸し出します。また、連携病院を募り、小児筋電義手の訓練ができる人材の育成、連携病院を通じた筋電義手の貸し出しを行っております。

皆さまのご厚意が子どもたちの夢や希望の支えとなっております。引き続きご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

なお、寄附の方法や小児筋電義手バンクの内容に関するお問い合わせについては、次の①又は②の窓口までお問い合わせください。

①兵庫県「ふるさとひょうご寄附金」への寄附
兵庫県健康福祉部障害福祉局
ユニバーサル推進課
住 所：兵庫県神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL：078(362)4379 FAX：078(362)9040
※租税上、より優遇を受けることができます。

②兵庫県社会福祉事業団への寄附
兵庫県立福祉のまちづくり研究所
ロボットリハビリテーションセンター課
住 所：兵庫県神戸市西区曙町1070
TEL：078(927)2727(内線3810又は3812)
FAX：078(925)9284

参考資料
【バンクからの筋電義手貸与人数】51人（令和元年5月31日時点）
※東大医学部付属病院を通じての貸与を含む
【寄附金額】115,683,391円（平成26年6月から令和元年5月31日まで）
※県マッチングファンド3,000万円を含む

【寄附物品】・中古筋電義手　1本　※部品に分けて再利用
・新品筋電義手部品　4本分
（平成26年6月から令和元年5月31日まで）
【支出金額】85,291,918円（平成26年6月から令和元年5月31日まで）

アシステック通信 第78号（令和元年7月）
［編集・発行］
社会福祉法人　兵庫県社会福祉事業団
総合リハビリテーションセンター
福祉のまちづくり研究所
〒651-2181　神戸市西区曙町1070
TEL 078-927-2727㈹　FAX 078-925-9284
https://www.assistech.hwc.or.jp

編集後記
新たな時代の始まりとともに、新たな福祉のまちづくり研究所の構築に向けた検討が始まった中、本号は記念すべき令和最初の発行となりました。
ラッキーセブンと末広がりの八、縁起の良い数字に願いを込めて。